

コミュニケーション活動における場面と英文法の役割*

松 谷 緑

English Grammar in the Communicative Context

Midori MATSUTANI

(Received September 30, 2005)

はじめに

英語の使用に際しては、発話された英語や書かれた英語を正しく理解し、また自らも表現したいことを正しく適切に相手に伝えるための「基本となる約束事」の知識の習得とその活用が必要である。実践的コミュニケーション能力への第一歩としての英文法の重要性を再確認し、2～3の具体的な事例を示しつつ、コンテクストをふまえた文法へのアプローチを提案したい。

自分の考えや気持ちを相手に理解してもらうためには、その言語を用いる言語共同体のメンバー間における約束事に則って表現する必要がある。ここで、敢えて「約束事」という言葉を使うのは、狭い意味での文法、すなわち、文レベルの文法だけでなく、発話の情報構造・語用論・社会言語学といった分野の知見の重要性を強調したいためである。コミュニケーションを効率よく行うには、音韻・語彙（単語・形態）・統語の知識を基礎とし、さらに、情報構造や場面における言語の機能に配慮する必要がある。

議論の前提として、セクション1では社会言語学的視点から「言語の機能」について、セクション2では「場面」と「コミュニケーション」といった2つの語の概念について、確認する。さらに、セクション3で、実践的コミュニケーション能力に資する英文法とはどのようなものであるか考察し、場面を意識した英文法へのアプローチについて、比較級・最上級・副詞・冠詞・受動態・ダイクシスといった文法項目の現象をとらえて論じ、若干の提案を試みる。

1. 言語の機能（社会言語学的視野）

そもそも、人はどういった目的を果たすために言葉を用いるのか、すなわち、発話の機能について、社会言語学の立場から、まとめておきたい。ハウムズ (Holmes, 1992: 286-287) は発話の機能を6つのカテゴリーに分けて説明している：

There are a number of ways of categorising the functions of speech. The following list has proved a useful one in sociolinguistic research.

1. Expressive utterances express the speaker's feelings, e.g. *I'm feeling great today.*
2. Directive utterances attempt to get someone to do something, e.g. *Clear the table.*
3. Referential utterances provide information, e.g. *At the third stroke it will be*

three o'clock precisely.

4. **Metalinguistic** utterances comment on language itself, e.g. 'Hegemony.' is not a common word.
5. **Poetic** utterances focus on aesthetic features of language, e.g. a poem, an ear-catching motto, a rhyme: *Peter Piper picked a peck of pickled peppers.*
6. **Phatic** utterances express solidarity and empathy with others, e.g. *Hi, how are you, lovely day isn't it!*

項目2 (指示機能)、項目3 (参照機能)、また項目4 (メタ言語機能) では特に正確さを求められる一方、項目1 (感情表出機能) や項目5 (詩的機能) においては、言葉に関わる人間の感性の伝達という目的が大切である。さらに、項目6 (交感的機能) の存在は、言語使用者の社会性を左右する基本的なものである。ハウムズはさらに、1つの発話は1つの機能と限られるわけではなく、ある発話が2つ以上の機能を果たし得ること、また、どの機能も「談話(discourse)」により表現され、しかも必ずしも発話された言葉どおりの意味というわけではないこと、すなわち、間接的発話の存在を指摘している。

2. 場面とコミュニケーション

このセクションでは、本稿のキーワードとなる2つの語の概念について確認する。

まず、本稿の題目にある「場面」とは広い意味でのコンテキスト、すなわち、文と文との関係・文や談話を取り巻く言語環境・発話の行われている環境・社会を含むものとする。一方で、英語を教える教師といった立場で考えれば、生徒の学習過程というコンテキスト、授業の流れ、教室といった環境の特殊性が背景にある。社会言語学の分野では教室というのは極めて特殊な環境とされる。答えを知っている人(教師)が知っているにもかかわらず、相手(生徒)に質問するという行為が当たり前のこととして行われる場である点で、日常とは違う空間といえる。

次の3人の研究者の context についての言及を参照されたい：

- 1) I will use the term "context" to refer not only to parts that precede or follow a passage and fix its meaning, but also to the complex fabric of relations that decide on the nature of human communication. (Scheffer, 1975 : 41-42)
- 2) I regard the context of utterance as the domain of pragmatics, The term 'contextual' will also be used to overlap with 'pragmatic', but in addition will include sentential environment (or context) when it refers to an expression. (Perkins, 1983 : 21)
- 3) DISCOURSE CONTEXT : the portion of discourse or text that surrounds a given sentence or sequence of sentences
SITUATION CONTEXT: the communicative context or setting in which the text as a speech act occurs

(Fleischman, 1990 : 3)

3) において、狭い意味での context (いわゆる文脈といわれるもの) と、広い意味での context (すなわち発話の現場) が区別されている。本稿での「場面」はその両者を含むものとしてほしい。英語の学習を支援する際、これまで見落とされがちであったのは、特に、後者の SITUATION CONTEXT への配慮であろう。言葉を使うときに、「前後の文脈を考えましょう」とはよく言われることであるが、実は、発話の行われている場所や話し手(書き手)と聞き手(読み手)の関係などといった「コミュニケーションの現場における各要素」への配慮は同じくらい大切なのである。

次に、もうひとつのキーワード、「コミュニケーション」について、本稿の立場を確認したい。手近な辞書で communication を見れば、communicate の名詞形であり、communicate の定義には 'If you communicate with someone, you share or exchange information with them, for example by speaking, writing, or using equipment.' (*Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*) とある。「コミュニケーション」という日本語は、この communication からのカタカナ語であるが、「コミュニケーション能力」という言葉が、日本における英語教育の場面で「実践的な聞き取り・会話能力」である、あるいは、少なくとも、それを優先的なものとするかのような意味で使われるようになったのはいつからで、また、なぜこのような事態になったのであろうか、もしかしたら、以下に示す「中学校学習指導要領」の「目標」の文言に起因するところがあるかもしれない。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

4 技能のうち、「読むことや書くこと」という言葉は省き、「『聞くことや話すこと』などの実践的コミュニケーション能力」とあり、そこから、聞くことや話すことへ活動のシフトを促すひとつの立場を読み取る必要があるのであろう。

次に、教師が考えなくてはいけないことは、現実にコミュニケーションのできる人を育成するために、学習者に対して、どのような指導をし、どのような能力の保証をしていかななくてはならないかである。

本稿の立場は、挨拶や海外旅行の旅先でのちょっとしたやり取りにとどまらず、現実の生活や仕事において、「英語が使える」人として行うコミュニケーション活動では、読むこと・書くことは当たり前能力として問われること、しかも、Eメールやインターネット等の普及により、その重要性はむしろ近年ますます高まっているとの認識を持ち、「読む、書く、聞く、話す」という4つをもって、目指すべき実践的コミュニケーション能力と考えるものである。

また、Eメールの普及はいわゆる話し言葉と書き言葉の垣根を低くしており、スタイルの問題は別に考えなくてはいけない。たとえば、バロン (Baron 1998) では、Eメールの特徴を以下のようにまとめている：

SUMMARY OF LINGUISTIC PROFILE OF E-MAIL

social dynamics: predominantly like writing

format: (mixed) writing and speech

grammar: LEXICON: predominantly like speech

SYNTAX: (mixed) writing and speech

style: predominantly like speech

もちろん、書き言葉であれ、話し言葉であれ、どのような目的・用途で、誰が誰に発信するかによって、スタイルは異なる。いずれにせよ、現実には、メールでスペリングミスが多い発信者が不利な立場に置かれることを考えれば、音声認識ソフトが一般に普及するまでは、単語を綴れることも重要である。

3. 場面を意識した英文法へのアプローチ

実践的コミュニケーション能力に資する英文法とはどのようなものであろうか。自分の考えや気持ちを言葉で相手に伝えるためには音、単語の形、語の配列に関する規則を知っていること、その知識を用いて文を作り、談話の構成を考える論理的思考力に加え、内容と話し手（書き手）と聞き手（読み手）の関係を含む場（誰が、誰に、どこで、何を、何のために、話して/書いているのか）の認知と配慮が必要である。しかし、学校の英語の授業で果たせることは限られており、大切な事は、学習者の将来のニーズに応じて応用の利く基礎的な力を保障することであろう。このセクションでは、「場面」を重視しながら英文法の機能を考察し、コミュニケーションの立場から英文法の活用をめざす際の留意点を指摘したい。

文法は場面において機能するということを分析的に理解するのに、言葉の意味理解における次のような段階を区分する (McKay, 2005: 52) ことは有効であろう。

Do you have any salt ?



intelligibility (recognizing an expression)

comprehensibility (knowing the meaning of the expression)

interpretability (knowing what the expression signifies in a particular sociocultural context)

in many ways it is what is referred to as interpretability that causes the greatest problems in the use of EIL for cross-cultural communication since interpretability entails questions of culture and context.

Do you have any salt ? という言葉を耳にした時、まず、それが英語の表現だとわかることが intelligibility 「認識」であり、次に、二人称 *you* の疑問文で *salt* は塩の意味であるとわかること、すなわち、直訳レベルの comprehensibility 「理解」、さらに、「塩がありますか」とはここでは、「塩をください」ということだとわかる意識のレベルを interpretability 「解釈」とする。EIL の使用において大きな問題となるのは文化や場面が絡む「解釈」のところであるとしている。しかし、当然、実践的コミュニケーションではこの「解釈」の段階まで求められる。

以下、場面を意識した英文法へのアプローチの方法を試みる。具体例については、文法項目ごとに様々な現象が存在するが、本稿では、特に、これまで、学生が教育実習に行って尋ねられた中学生の素朴な疑問や、卒業生から寄せられた現場からの質問から今回のテーマに沿うものをいくつか取り上げる。

3. 1 できるだけ、場面に即して「使われる文」を用いる

「私の兄はうちのクラブの中で一番テニスがうまい」に該当する英語は

(1) My brother is the best tennis player in our club.

である。主語がどういう人なのかを繫辞 be- 動詞で補語の位置に形容詞 best を盛り込んだ名詞句と繋ぎ、伝えている。似たような意味で(2)の言い方も可能である。(1)との違いは何であろうか。

(2) My brother plays tennis best in our club.

(2)の場合、構文は主語と他動詞から成り、動詞句で副詞 best が用いられている。すなわち、兄が 'plays tennis' すると一番なのだと言っており、この文の意味は、「(うちのクラブにはサッカーをする人もバレーボールをする人もテニスをする人もいろいろいるが、)私の兄は、サッカーやバレーボールはともかく、テニスをすると一番うまいのだ。」と解釈される。つまり、発話者が(1)と(2)どちらの文を用いるかはこの文にいたる事前情報によって異なることになる。授業で教師がこういったことを言葉で説明するのは(特に中学校では)困難であるが、しかし、場面を設定したり、文脈をふまえた例文の選択に配慮することは可能であろう。構文や統語法をまずは習得しなくてはならないのはもちろんであるが、せつかく学んだ文がどう機能するかわからなくては、統語の知識も適切に活用されないことになる。情報構造や文の機能といった視点を指導に活かしたい。

もうひとつ、別の例で考えてみたい。次の2つの英文について、教師はどちらを教えるべきであろうか。

(3) I am taller than he.

(4) I am taller than him.

実情としては(4)が主流である。(3)は、あくまで、構造上は主格を比べるからという考え方であるが、実際には、(4)が用いられる。前置詞の後の位置には目的語という感覚が働くからといわれている。'It's I.' とは言わず、'It's me.' と言う。環境は少し異なるが、主格が目的格になっているという点では類似の現象である。それでも、格にこだわって指導しておきたいと思えば、

(5) I am taller than he is.

とすると自然である。一方、たとえば、次の(6)(7)における格形式の使い分けは必要である。ペットのベンという犬について、(6)では目的語のベンと私を比較しており、(7)は主語のマイクと私を比較している。

(6) I always thought Mike liked Ben more than me.

「マイクは私のことよりベンの方を好きだと思っていた。」

(7) I always thought Mike liked Ben more than I.

「ベンの方は私よりマイクの方が好きである(私はマイクほどベンの方を好きではない)と思っていた。」

つまり、(3)と(4)について、(4)が普通なのは、意味に曖昧性が生じないことが前提である。(4)の場面においては、主格以外の比較の対象は存在せず、格形式の担う役割は重要ではない。しかし、(6)(7)のように、同じ比較級の文でも場面が変わり、関与者が輻湊すれば、格が本来の役割を担い、その選択自体が実質的意味を変化させることになる。

3. 2 形式だけではなく(文における/場面における)意味・機能を考える

ここでは、副詞、副詞句、冠詞を取り上げ、同じ形でもその機能が異なっている場合に着目する。まず、(8)(9)(10)に示すのはいずれも *ly* を語尾に持つ副詞であるが、副詞の内ですらいくつもの種類に分類可能である。ADJUNCT はいわゆる動詞(句)修飾、SUBJUNCT は文修飾、DISJUNCT は発話方法や内容についての評価的コメントを表す。この種類によって、文中現れる位置の制約や構文の書き換えが可能かどうかといった点について融通性が変わってくることを注意しなくてはならない。(Quirk, et al., 1985: 473-653)

- (8) He spoke to me about it briefly. ADJUNCT
 (9) He kindly offered me a ride. SUBJUNCT
 (10) They are probably at home. DISJUNCT

さらに、同じ語でもある場合は SUBJUNCT として機能し、またある場合は ADJUNCT として機能することがある。(9)で *kindly* は SUBJUNCT であるが、(11)では ADJUNCT である：

- (11) She spoke kindly to the new students.

分裂文で現れるのは主語・補語・目的語のような文の要素としての性質を比較的持っている ADJUNCT である：

- (12) It was kindly that she spoke to the new students.

次の2つの文も一見類似しているが、前提となっている情報が大きく異なり、(13)では副詞句が必須なのに対して、(14)では必ずしも必要な要素ではない。

- (13) She put the letter on the kitchen table. [obligatory]
 (14) She found the letter on the kitchen table. [optional]

場面を描けば、比較的容易に納得できるであろう。(13)では、‘She put’ で始まる。ある女性が手紙を置いたと言う場合、彼女の手には既に手紙が握られている(既知情報)。この文が存在する意義はその手紙をどこにおいたかという新情報を伝えることで生じる。一方(14)では、‘She found’ と始まる。ある女性が手紙を見つけたという場合は、見つけていない状態から見つけた状態への移行があり、すなわち、本ではなく、財布でもなく、手紙を見つけたということが

新情報となり得る。‘She put the letter.’ では何か物足りない感じがするが、‘She found the letter.’ はそうでもないのは、そのためである。

次に、冠詞に注目して、解釈における場面の重要性を考えたい。(15)は二通りの解釈を許す：

(15) Helen wants to marry a professional footballer.

ひとつの場合は、(A) ヘレンには恋人がいて、彼はプロサッカー選手である、その彼と結婚したいと考えているというもので、もうひとつは、(B) ヘレンはプロサッカー選手に憧れており、誰でもいいから（というわけにもゆくまいが）プロサッカー選手と結婚したいと考えているという場合である。すなわち、(A) では、a professional footballer は特定の人物であるのに対して、(B) では、不定の人物（プロサッカー選手一般）という解釈である。この二通りの用いられ方を分けるのは、やはり、前提となる情報や発話の場面である。(A) は、たとえば、ヘレンの友人が自分の友人（ヘレンのことをあまりよく知らない人物）に対しての発話となり得る。この友人にとっては、ヘレンの彼であるプロサッカー選手は新情報である。このように、不定冠詞はともすれば不定のものと言われがちであるがそうではない。以下に示すように、(a)(c)(e)では、場面上、当然特定の人／ものを指示する (Berk, 1999 : 59参照)：

INDEFINITE? ARTICLE

Article *a* with specific reference

(a) Becky is dating a nice doctor.

(c) She is slicing a juicy mango.

(e) I see a red Porsche.

Article *a* with nonspecific reference

(b) Becky is looking for a nice doctor.

(d) I enjoy a juicy mango.

(f) I want a red Porsche.

不定冠詞は名詞句を談話に導入する、あるいは、新情報を談話に持ち込むのに用いられるのである。

3. 3 情報構造を無視しない

ここでは、受動態を取り上げ、その本来の姿／存在意義を考えたい。(16)は受動態の文が現れるひとつの典型的な談話構造と言ってよいであろう：

(16) What happened to your avocado tree? Oh, it was damaged by the wind.

先行する文で問われている文末の ‘your avocado tree’ を受けて、既知情報となったそれを代名詞 ‘it’ で受け、主題として、それがどうしたのかについての新情報を提供していく自然な談話の流れである。受動態には受動態の登場する意味があるのである。能動文がまずあってその目的語を主語にすえて同義の文を書き換えるというものではないということを確認したい。そう考えれば、by ~句は新情報を提供するもので、代名詞が agent の位置に生じることはまずない。

(17) ?Cynthia was hurt by me.

(18) ?The city was destroyed by it.

そもそもほとんどの受動態の文は agentless である。書き言葉のテキストと放送メディアの言語で、80～85パーセントが agentless との調査報告がある。(Berk, 1999 : 120) また、long passive (いわゆる by ～句付受身文) が多いのは、ニュースや学術的な書き物であるとの指摘もある。(Biber, et.al., 1999 : 937) 受動態の存在意義は、まさに、この agent を示さなくてよいことにある：

- (19) The car door was scratched last night.
 (20) An elephant fell on her and she was killed instantly.
 (21) An important file was misplaced.

(19)のように誰がしたかわからない場合、(20)のように談話構造上文脈からわかる場合、(21)のように責任を回避するなど何らかの事情のため、誰がしたかを意図的に示さない場合である。学習者を支援する場合、能動態と受動態の書き換え練習は構文の定着には多少の意味があるであろうが、コミュニケーションを重視する視点から考えれば安易にすべきではないと考えられる。

3. 4 DEIXIS (発話行為依存的指示) の導入には場面を用いる

DEIXIS (ダイクシス) とは、以下に挙げるようなものを指す。発話行為に依存するもので、場面の設定なくしては理解の難しいものである。裏返せば、指導においても、うまく場面をもちこめば、言葉でくどくどと説明するまでもなく、理解されるものであるとも言える。

PERSON DEIXIS: my, mine, you, your, yours, we, ours, us, . . .

DEMONSTRATIVE ARTICLES: this woman, that man, those children, . . .

TIME DEIXIS: now, then, tomorrow, seven days ago, last week, . . .

PLACE DEIXIS: here, there, this place, these parks, yonder mountains, . . .

DIRECTIONAL TERMS: before/behind, left/right, front/back, . . .

おわりに

コミュニケーション能力とは、具体的に、如何にその場面において対応／反応できるかということに関わる。その前提として必要なのは基礎的な文法の知識である。まずは語彙・形態・統語といった知識を活用し、正しい文が構築できることが大切である。同時に、実際のコミュニケーションは1つの文で成立することはまずないといってよい。したがって、文と文とのつながり、さらには、自分が話している／書いている情報の受け手への配慮といったことが総合的に統合されて、コミュニケーションが成立するといえるであろう。

統語レベルで文法的か非文法的かが判断できるということは言語の能力として極めて重要である、次に、その文が容認されるものかそうでないかの判断ができるかどうか、コミュニケーションに向き合う場合には大切である。たとえば、日常では、関係代名詞をやたらに連ねた文を使わないであろう。統語の知識を使えばできることで、(狭い意味での) 文法的には間違っていないなくても、それが、相手に負担をかける、わかりにくい、すなわち容認されにくい文となれば、避けるべきである。加えて、文が談話の中でどのように機能するのかを考えなくては、自己表現したつもりでいても、相手に意図どおりに伝わらない、という事態を招く。

私達は英語を用いる際、容認されにくいものを無理に使おうとしていないだろうか、あるいは、自分の置かれている場面において、談話の機能を十分に活かして英語を用いているだろうか、母語である日本語を使う際には当たり前のごとくやっていることを、英語を使う際に忘れてはいないだろうか。もちろん、英語と日本語と、言語が違えば、表現方法や暗黙の了解事項も異なっている場合もある。けれども、いずれも人間の使う言語である。共通の基本的規則や配慮も機能するところがある。英語独特の基本となる約束事の知識を求めることと同時に、英語・日本語共通にある約束事にももう一度目を向け、より効率的かつ快適なコミュニケーションができることを目指したい。

*本稿は平成16年度山口大学教育学部研究支援経費を受けた「英語を正しく理解するための英文法知識の活用を促す指導」による研究成果を含むものであり、平成16年12月4日に山口大学で開催された山口大学英語教育研究会において「場面を意識したコミュニケーション活動における英文法の役割」と題して口頭発表した論考を加筆修正したものである。

参考文献

- Baron, N. S. 1998. 'Email as a Contact Language : The Evolution of a Modality,' Paper Presented at the International Conference on Speech, Writing and Context, University of Nottingham, July 1998.
- Baron, N. S. 2000. *Alphabet to Email : How Written English Evolved and Where It's Heading*. London: Routledge.
- Berk, L. M. 1999. *English Syntax : From Word to Discourse*. New York and Oxford : Oxford University Press.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*. 1987. 3rd edn. (2001). Harper Collins Publishers.
- Fleischman, S. 1990. *Tense and Narrativity : From Medieval Performance to Modern Fiction*. London: Routledge.
- Holmes, J. 1992. *An Introduction to Sociolinguistics*. London and New York: Longman.
- McKay, S. L. 2002. *Teaching English as an International Language: Rethinking Goals and Approaches*. Oxford: Oxford University Press.
- Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Scheffer, J. 1975. *The Progressive in English*. Amsterdam : North-Holland Publishing Company.
- 文部省1999『中学校学習指導要領解説－外国語編－』 東京書籍